

調査報告

イリノイ州立大学附属図書館所蔵中世小説関係古典籍書誌調査報告

勝俣 隆 (国語教育専修)

Bibliographical Research on Japanese Medieval Tales in the Library of the University of Illinois at Urbana-Champaign

Japanese Language Education Course

Takashi KATSUMATA

はじめに

平成 18 年 9 月 1 日から 8 日まで、日本学術振興会科学研究費補助金により海外に所蔵される中世小説(お伽草子・室町物語)関係の伝本を調査するため、米国を訪れ、イリノイ州立大学附属図書館(Library of the University of Illinois at Urbana-Champaign)において現物を閲覧し、調査をした。本稿は、その調査報告である。イリノイ州立大学は、シカゴから南へ約 260 キロメートルの大学都市アーバナ・シャンペイン(Urbana-Champaign)にある。アーバナ・シャンペイン市は、双子の都市で両市併せて人口約 14 万人のうちの 3 万 5 千人が学生で、8 割が大学関係者という大学の街である。周囲がトウモロコシ畑の中に大学の飛行場を初めとする広大なキャンパスが広がっており、大学の図書館も 40 余りあるが、今回訪問した貴重書図書館(Rare Book & Manuscript Library)があるのは、大学の南側地域にある中央図書館(Main Library)の三階部分である。広々としていて図書館員が貴重書図書館だけでも 7 名ほどいらした。大学全体で、図書館員の数は、常勤が 136 名、フルタイムに近い非常勤が 214 名、合計 350 名という膨大な人数である。蔵書は合計で 1000 万冊、図書以外の資料が 1380 万点を越えており、トップのハーヴァード大学の約 1500 万冊には及ばないが、それでも全米の大学で 3 位を誇る蔵書量である。ちなみに長崎大学は、学生数が約 8500 人、蔵書が 3 館合わせて約 100 万冊、図書館員は 3 館で 34 人であるから、イリノイ州立大学の規模が分らうというものである。日本の図書は当該の貴重書室並びに別の図書館のアジア文庫にあり、明治以前の古典籍は貴重書室、明治以降の近代文学関係等はアジア文庫に収められているそうである。

丸付き数字の意味は、次の通りである。①写本・版本の区別。②所蔵者整理書

名。③所蔵者整理番号。④外題。⑤内題。⑥刊写年次。⑦保存状態。⑧保存形態。⑨表紙の生地・色・模様。⑩見返し。⑪料紙。⑫装丁。⑬数量。⑭表紙寸法。⑮字高または匡郭。⑯表紙以外の紙数(遊紙の丁数)。⑰本文の行数。⑱絵の状態、数量。⑲その他(奥書・刊記・蔵書印・入手の経緯。気づき等)。略とあるのは不明または該当項目がないものである。なお、国文学研究資料館では、挿絵の数え方を、絵の内容に係わらず、半丁分を一面としているが、本稿では、一枚の絵が見開き両面に渡る場合、二面ではなく、絵の内容により一図と計算したので、ご了解いただきたい。

1, 熊野の本地

①写本。②くまのゝ本地。③Asian Books MS PL 790 .K 8 ④表紙左肩の橙色地に金で霞・水の流れ・草を描いた題箋(14.8×3.1 糎)に「くまのゝ本地 上」と墨書してある。(下はなく、上のみ存)。⑤なし ⑥書写年不明。江戸前期 ⑦良好。⑧24.5×18.3 糎の紺布製帙入り。帙の内側に「The Joseph K. Yamagiwa Book Collection」の貼紙あり。帙題箋「くまのゝ本地 奈良繪本零本」(17.7×2.8 糎)⑨鉄紺地に金で霞みを三段に描き、中央より上には二段に水の流れと草花模様を描き、中央より下には、三段に水の流れと草花模様を描いた美しいもの。なお、裏表紙は、表表紙と料紙が連続しており、同様の霞と水の流れ、草花模様が描かれている⑩銀の網目模様で四角く細かい金銀の箔を散らしたもの。裏見返しも同様。⑪楮 ⑫袋綴じ。⑬上一冊のみ(下冊なし)。⑭24.3 糎×17.9 糎。⑮20.0 糎×15.5 糎。⑯上冊全 22 丁(本文 21 丁の前に遊紙 1 丁) ⑰10 行。1 行 17~18 字⑱残存全 5 図(上冊 第一図(二ウ)・第二図(六ウ)・第三図(十オ)・第四図(十三オ)・第五図(十八オ) 第一図は、天竺摩竭陀国のぜんざい王(善財王)が、南殿の花で子育てをする鳥を見て、自分には七人の妃がいても、一人も子供がいないということを嘆く場面。図では、ぜんざい王にごすいでん(五衰殿)と思われる妃、さらに召使いの女性が描かれ、まだ登場すべきでない五衰殿が既に登場している点に本文との齟齬が見られる。また、「三月中旬」という設定に合わせ、桜の花と思われる花は咲いており、鳥も親鳥が二羽描かれているが、鳥の巣や鳥の子供は見あたらない。例えば、和歌山県立博物館所蔵の『熊野権現縁起絵巻』では、ぜんざい王が独りで、松の木に巣くった白い鳥の親鳥二羽と子鳥四羽を見ている図となっており、「御にはの松に、しゆみやうてうといふ鳥、すをかけ、子をはこくむを御らんして」とある本文に忠実な挿絵となっている点と比べると、その違いが大きい(注1)。第二図は、本文に対応する挿絵の位置としては、ぜんざい王にごすいでんの女御と比翼連理の契りを結ぶ場面であるが、絵としては、大臣が王子誕生の手段として、貧民への七珍万宝を施行することを勧めて

いる場面と思われる。但し、ぜんざい王がごすいでんの女御のことを聞き出している場面とも取れる。第三図は、本文との関係から、ごすいでんの懐妊をぜんざい王とごすいでんの女御が喜びあっている場面と思われる。二人が袖を顔に当て泣いているように見えるのは喜びの涙であろうが、やや不自然な気もする。むしろ、九百九十九人の后たちの奸計で、ぜんざい王とごすいでんの女御が無理矢理引き離され、ぜんざい王が五衰殿から立ち去らざるを得なくなったのを嘆いている場面と取る方が自然か。その場合には、位置的に第五図より後の場面が前に紛れ込んでいることになろう。第四図は、本文との位置関係からすれば、九百九十九人の后たちの前で、相人が、ごすいでんの女御から誕生するのが王子で、かつ、額に米という文字が三つ並んで生まれ、出世し、七歳で世の中を治めることを予言する場面である。額に米という文字がある人物が出世するというのは、説経の『山椒太夫』で厨子王の描写にも見られるものである。ところが、この挿絵では、相人の前にぜんざい王やごすいでんの女御が描かれている。相人が出てくる場面はもう一箇所あり、九百九十九人の后たちに脅迫され、ぜんざい王の前で、生まれてくる王子が七歳の時に王の首をはねるという嘘の占いを報告する場面である。絵の内容から判断して、明らかに、これは、相人が嘘の占いを王に告げている場面と思われる。従って、これも、位置的には、もう少し後に来ないと、本来、具合が悪いところである。また、先にも挙げた和歌山県立博物館蔵『熊野権現縁起絵巻』では、九百九十九人の后たちもぜんざい王と一緒に相人の嘘の報告を聞く様子が多数の後の描写で見事に描かれているが、本書では、九百九十九人の后のうち一人だけが、省略して描かれている。絵巻の絵が冊子の絵になる時、スペースの関係で、人物の数が減らされることは、既に拙稿「中世小説に於ける挿絵と本文の関係について」の第五法則として、指摘してきたところである(注2)。第五図は、本文の位置からは、相人がぜんざい王の前で占う場面が来るべきところなので、本来は図四が置かれる位置であろう。しかし、現在の装丁では、九百九十九人の后たちが、ぜんざい王を五衰殿から追い出すための計略として、九百九十九人の老女に鉄輪を頭に付けさせ、鉄輪の足に火を灯して、赤い着物を着せ、ぜんざい王が五衰殿から出なければ、天から鬼神が降ってきて、公卿・殿上人を取り殺すと叫ばせる場面が描かれている。絵では、赤い着物を着た四人の女性が鉄輪を頭に付け、鉄輪の足に蠟燭を灯している様子が描かれている。描がかれた女性は老女ではないが、他の場面の絵と比べると、まあまあ本文に忠実に描かれている方ではないかと思われる。⑲蔵書印(本文の冒頭にある遊紙の右肩に「J.K.YAMAGIWA」の所蔵印(紫)あり。Joseph Koshimi Yamagiwa氏(1906~1968)は、ミシガン州立大学の東洋言語部門の教授で、堤中納言物語や平治物語の英訳(Edwin O.Reischauer との共著)もあり、戦争中は、千五百

人に及ぶアメリカ兵に日本語教育を施した人物である。イリノイ州立大学附属図書館の所蔵する多くの日本古典籍は Joseph K. Yamagiwa 氏が所蔵されていたものだそうである。本書は、室町時代物語類現存本簡明目録に拠れば、分類不明であるが、今回の調査で、(八)の系統に近いことが分った。本文は井田等氏蔵『熊野の本地』(絵巻上下二巻)に近いが、井田氏蔵本より分りやすいところが何カ所か見いだせる(注3)。例えば、「千人のきさきに、一人つゝいてきたまはゝ、千人のわうしをまふけへし。二人つゝまふけ給ひ候はゝ、大國のわうしとこそいはれんとおもふに、」と井田氏蔵本のあるところは、本書では「千人のきさきに、一人つゝ出きたまはゝ、千人のわうしをまふくへし。二人つゝまふければ、二千人わうしをまうけ、大國のわうしとこそいはれんと思ふに、」(4ウ)とあって、意味が通る。他にも、井田氏蔵本で「月の水ととまれは、うふのかみの、うちへいらせ給ひて」は、本書は「月の水とゝまれは、うふのかみ、はらのうちへいらせ給ひて」(8ウ)と作り、分りやすい。また、井田本で、「大わうの御子をはらみたなとや申らん」とある意味不明箇所は、本書の「大わうの御子をはらみたとや申らん」(10ウ)で訂正出来る。また、井田本で「さうにんの、あるをきゝ、いさやよひて、うしなはせん」とある部分も、本書の「さうにんの、あるをきゝ、いさやよひて、うらなはせん」(12オ)とある方が内容的に正しいと判断される。また、本書独自の本文としては、次のものがある。大王が五衰殿の女御を大切にするように臣下に号令した後の描写は、井田本では、「大わう、いつきかしつき給ふも、しかしたゝほとけの御りしやうにてこそ候へと、きせひ申させ給ふほとに、」とある部分は、本書では、「大わう、いつきかしつき給ふも、しかしたゝほとけの御りしやうなりとおほしめして、御ほとけに申させ給ふやう、日比はあさましかりし身の大わう大事におほしめし候事をひとへに御佛の御りしやうにてこそ候へと、きせい申させ給ふほとに」(6オ～7ウ)となっており、ゴシック部分は独自異文である。他にも、細かな異同は多いが、もう一つ比較的長いものを挙げておく。相人が五衰殿の生む御子の性別や将来を占う場面で、井田本は、「しはしうらなひ申、これはわうしにてましますと申ければ、御ひたひによねといひもしか三つならひて候」とある部分、本書は、「しはしうらなひ申、これはわうしにておはしますと申ければ、いよへやすからすおほしめしさてはいかにとありければ、御ひたいによねといふもしか三つならひて候」(12オ・ウ)とあって、太字部分は本書の独自異文であると共に、本来、内容的にこの一文がないと意味が不分明になることから、本書の本文の優れているところと言えよう。

2, しぐれ

①写本。②しぐれ。③MS PL 790.S 43。④しぐれ 題箋は中央に 10. 3×2。

5 種の橙地に薄緑の波模様で、「しくれ 下」と元題箋がある。⑤なし。⑥江戸前期。⑦本文の四辺が水に浸かったような痕があり、いたずら書きや絵の一部破損等があり、保存状態はあまりよくない。⑧24. 4×17. 4 種の帙入り。帙の表紙部分には、題箋（2. 7×16. 1 種）があり、「しくれ 奈良繪本」と墨書してあるが、新しいものである。帙の内側には、「The Joseph K. Yamagiwa Book Collection」の貼紙あり。⑨鉄紺地に金で竹と笹の模様。裏表紙は鉄紺地に金で蕨の葉模様。裏表紙は特に、三隅を初めとして、剥離している部分が目立つ。⑩銀地に卍つなぎ紋の空押し。⑪楮。⑫袋綴じ。⑬下一冊のみ存（本来、上・中・下三冊であるが、本書は零本。）⑭17. 0×24. 2 種。⑮12. 5×21. 0 種。⑯下冊現存 31 丁。但し、二才後ろや二十ウの後に本来あるべき挿絵や本文等が欠落している箇所があるので、完本であれば、あと二丁ほど、存在したと推測される）。⑰13 行。1 行 13～15 字⑱上冊全 7 図（上冊 第一図（五ウ）・第二図（九オ）・第三図（十一ウ。但し、痕跡のみで現存せず）・第四図（十七ウ・半分欠）・第五図（二十二ウ）、第六図（二十六オ）・第七図（二十九オ）。第一図は、春の夜の月に照らされた中を牛車に乗って中將が出掛ける時、衣の中に男女の形代を発見し、呪いのために真に愛する姫君を忘れていたことに気づくクライマックスの場面である。絵を見ると、牛車に乗って中將が見ているのは手紙のようなもので人形ではない。中將や大將の姫君のことが書いてある物も紙ではなく、五六寸の形代そのものであるはずなので、本文と齟齬があるところである。第二図は、中將が愛する姫君が暮らしていた部屋を訪れたところ、琴・琵琶・笛のそれぞれに書き物があり、それを読むと、愛する姫君が中將の訪れないことを不審に思い自分の不運を嘆く歌の書かれた手紙であることが分かり、中將が姫君の手紙を顔に押し当てて号泣する場面である。挿絵を見ると、琴や琵琶の前で、手紙を手を持って袖を顔に当てて泣いている中將が描かれている。手紙を顔に押し当ててはいないが、ほぼ忠実と言っても良い構図である。しかしながら、本書には、後に追加されたと思われるいたずら書きがあり、中將の向かい側に、半透明な姫君がまるで幽霊かの如くに座っている図が描かれている。これは、中將が姫君を恋しく思う心中表現として描かれたものであろうが、あくまで後世の手すさびであって、原画にあった訳ではない。ただ、不思議なことに姫君の姿があっても不思議でないほど、よく場面に合ったいたずら書きではある。第三図は、残念ながら現存していないが、本文の内容からすれば、形代が取れて正気に戻った中將が、今宮中で時めいている「しよきやうてん（承香殿）」がかつての愛する姫君ではないかと疑い、確かめるために内裏へ向かう場面が描がかれていた可能性がある。第四図は、中將が「おとひ」に出家の決意を告げ、二人で泣き悲しんでいる場面である。二人の前に手紙の様な紙が広げられているが、その中央に「氷」と書いてあるのはいたずら

ら書きか。中將が髻を切って紙の上においてあるのかと最初思ったが、よく見ると漢字になっている。本書は他にも、いたずら書きが多数見られるので、これもそうした悪戯の一つとみなすべきか。ただ、墨の色は濃く、原本の色彩と変わらない感じなのが気になるころではある。第五図は、月光の射す中、牛車に乗って中將が侍従に見送られて笛を吹きながら去って行く、情趣に溢れた場面である。挿絵も金の霞みを使い豪華に描かれている。特に目立つ齟齬などはない。第六図は、帝が中將の出家に驚いて、承香殿の女御に知らせにくるが、それを聞いた承香殿の女御が声を上げて泣いてしまう場面である。帝はその様子を見て、女御と中將が深い関係にあったことを知るのである。絵では、承香殿の女御は、机帳の蔭に隠れて泣いており、自然な感じがする。本文よりも絵の方に自然さを感じる珍しい例である。第七図は、承香殿の女御の腹に皇子三人、皇女二人が誕生し、帝の一家が榮える様子を描いた場面である。絵では、皇子一人と皇女二人が描かれ、帝と承香殿の女御の他に侍女や「おとひ」と思われる人物も描かれている。皇子・皇女の数は、絵巻から冊子本になる過程で人数の省略がなされたのであろう。中央に三方や両口の銚子が置かれているのも、祝儀の場を象徴的に表わすものとして相応しい。ただ、残念なことに、他の挿絵もそうであるが、本挿絵も、子供が墨で「おとひ」の顔を塗りつぶしたり、皇女や霞みなどの上にも、墨で線を引いたりして、汚損されてしまっている。恐らく、本書が J.K.Yamagiwa 氏に購入される以前の所有者のいずれかが本書の価値がよく分らず、子供の遊び物としていた結果であろう。東京大学総合図書館の所蔵するお伽草子でも同様に顔に墨の塗られた伝本を見たことがあるが、貴重な書籍がその価値の分らぬ児童の手によって被害を受けることは誠に遺憾というしかない。⑩「しぐれ」の伝本は数が多く、室町時代物語類現存本簡明目録だけでも27本載っている。そのうち、本書は分類不明とされているが、今回の調査で、B(二)の竜門文庫元和三年(一六一七)写本や藤屋小左衛門享保六年(一七二一)刊絵入半紙本と同じ系統のものと判明した。享保六年の刊本との校合について若干述べる。本書は、享保六年刊「志俱礼濃物語」の巻四の途中から巻五の終りまでに相当する本文を有する。

そのうち、本書は、享保六年刊本の本文上の誤りを指摘出来る箇所が多数ある。例えば、以下の諸例である。例は、前半が享保六年刊本の本文、後半が本書の本文で、太字が相違点である。正月元三の朝拝の場面「みかとは、・・・しよきやうてんのはんをひの御すかた、まつ見まいらせんとて」「御門は、・・・しよきやうてんの女御の御すかたまつ見まいらせんとて」(1オ)、中將が内裏へ出仕する場面「はるこゝちおはすれは、うれしくおほしける」「はるゝこちおはすれは、うれしくおほしける」(十一オ)、御門が障子を開ける場面「あひの御しやうしを、御身つから、あけさせ給て」「あひのしやうしを御みつから

あけさせたまひて」(十三オ)、中將が御門の承香殿の女御に対する寵愛ぶりをみて失望する場面「しも雪とも、たちとこたちところにて、きえうせはや」「霜雪ともたち所に、きえうせはや」(十三ウ)、中將が侍従が紙燭を差して通るのを見つける場面「見給へは、しやうそくさして、おもふ事なくとをりければ」「みたまへは、しやうそくさして、思ふ事なけにとをりければ」(十九オ)、中將が比叡山の聖に出家を申し出る場面「ひしりをするといふ事は、かやうのときのようにてこそあれ」「ひしりをしるといふ事はかやうの時の用にてこそあれ」(二十三ウ)、承香殿の女御が、中將の出家を告げられ、声を上げて泣く場面「つゝむなみたを、かねて、こゑをたて候はんと、なき出給ふ。」「つゝむなみたを、せきかねて、こゑをたてゝわつとなきたまふ。」(二十六ウ)。以上の例はどれも、本書の本文の方が意味がよく通るところである。他には、享保六年刊本の脱文と思われるところを指摘出来る箇所がある。中將が「おとひ」に出家の意志を語る場面で、「わか身もよき心ちはましまさし。我これにあらんかきりは、おとひをも、よもめされし」とある部分は、本書では、「わか身もよき心はましまさし。我これにあらん事もけふとあすとのほとなり。我あらんかきりはおとひもめされし」(十五ウ)とあって、太字部分は、享保六年刊本の脱文と思われる。同様に、中將が最後のお別れで御門の姿を見ようとした場面「中將は、みかとへまいり給ひて、みかと、いまいちと、見まいらせんとおもひて、一日、ゐ給ひけれとも、れいのしよきやうてんに、こもり、といふ御笛をは、御文かきそへて、せいりうてんの御たなに、をかれけり」「中將は、大里へまいりたまひて、御門をいま一とみまいらせんと思ひて、一日みたまひけれとも、れいのしよきやうてんに、こもりゐさせたまへは、ちからおよはず、日もくれければ、おとまるといふ御笛をは、文かきそへて、せいりやうてんのみたなに、おかれける」も、明らかに太字部分が、享保六年刊本で欠落していることが本書で指摘出来る。一方、本書にも大きな欠落がある。一つは、二オの末尾「大臣くきやうまいれとも、おもあはせたまはず、かた」の後から、中將が大臣の家に帰り、おとひに姫君の様子を尋ねる部分の約一丁分が欠落している。二つ目は、二十ウの末尾「せんとうをまかり出ぬるみなれば、なとかはおほし忘れ」の後からやはり約一丁分が欠損している。これは、中將が侍従に別れを告げている場面である。ここは、装丁としてはきちんと繋がった部分なので、どうも本書は、最初の制作の段階で、乱丁があったと推測するのが適当のようである。なお、本書の裏見返しの左上隅には、「東京神田 ISSEIDO」の貼紙がある。漢字は右から左へ読む古い書式である。6の「二十四孝」も同じ一誠堂書店から昭和九年に購入しているので、同じ時か、それに近い時期に J.K.Yamagiwa 氏が、神田の一誠堂書店から購入したものであろう。

3. 釈迦一代記

①写本。②釈迦一代記。③MS.PL 790 S41. The Joseph K.Yamagiwa Book Collection④釈迦一代記(11×2. 5 糎。後、書・中央)⑤なし。⑥江戸中期。⑦良好。⑧15.8×23. 8 糎の帙入り。帙題「釈迦本地 奈良繪本 零本」⑨薄黄土色。無地。⑩本文共紙。表見返しから本文が始まっている。⑪楮。⑫袋綴、横長本。⑬一冊(本来上中下三冊のうち下冊のみ)。⑭15. 5×23. 3 糎。⑮約12×19. 5 糎。⑯下冊21丁。⑰13行。1行15字ほど。⑱下冊全5図。第一図(一オ)・第二図(五ウ)・第三図(九オ)・第四図(十四ウ)・第五図(二十一オ。ここは裏見返しに当たる)⑲蔵書印「西園寺蔵書印」(四角・3. 0×2. 8 糎、朱印)。

4. 釈迦一代記

①刊本。②釈迦一代記。③x PL 790.S41 1695 V.1-3。④題箋「釋迦一代記 繪入 上(中・下)」(18. 2×3. 5 糎。左肩・重郭・原・刷)。但し、現在、中冊の題箋は剥離して痕跡のみ残る。⑤しやかの御本地 上(中・下)。⑥寛文頃(室町時代物語類現存本簡明目録に拠る。)。⑦普通。表紙虫食い。⑧26. 5×19. 8 糎の帙入り。帙題箋「釈迦一代記 桑村刊」(後)。⑨無色・無地。⑩本文共紙。⑪楮。⑫袋綴じ。⑬上中下三冊。⑭26. 2×19. 3 糎。⑮22. 7×17. 5 糎。⑯全39丁(上冊14丁、中冊11丁、下冊14丁)。⑰16行。1行29字程度⑱全十二図 上冊四図。第一図(二ウ・三オ)・第二図(六ウ・七オ)・第三図(十ウ・十一オ)・第四図(十四オ)。中冊五図。第五図(二オ)・第六図(四ウ・五オ)・第七図(六オ)・第八図(八オ)・第九図(十ウ・十一オ)、下冊三図。第十図(二ウ・三オ)・第十一図(六ウ・七オ)・第十二図(十一ウ・十二オ)。⑲刊記 淺草觀世音裏御門通 書林 栗村半藏 端書き(初丁オ)「明治四辛未年九月吉日求之」下冊末尾裏見返し「明治四辛未年末秋吉辰求之 本主 越谷喜平」中冊見返しに「上州群馬郡高崎駅鎌倉町 越谷市太⑩ 明治四辛未年九月吉辰求之 持主 越谷喜平」とある。なお、帙の裏側に次のような記事あり。「釈迦の本地(桑村板)(本地から傍線を引いて「一代記(初板本ニハ本地トアリ)」と記す。)此本、弘文莊目録十一号(昭和十三年五月)に出づ。上巻終一丁缺。二十円。しかし、この桑村板は、実は和泉屋板の求板なるべし。内容は、室町物語集第四に出した寛永板と、大差なし。本文は五十三頁。解題は五〇五頁にあり。」

「さらに、以下のような本の宣伝文の切り抜きを貼り付け、注を付けている。

「四 しやかの御本地 本地物美濃形3冊41丁每半16行菱川師宣繪面入り、はし書には「釋尊記」とあり内題に「はしやかの御本地」とせり刊記に「淺草觀世音裏御門通書林桑村半藏」とあれば元禄頃の再摺りなるべし上巻痕あり3

0 圓」コレハ痰本ニテ三十圓トイフ 巖松堂」

「室町物語集第四に出した」という表現からして、室町物語集第四の編纂者である横山重氏の書かれたものであろう。

なお、室町時代物語類現存本簡明目録に、(延宝天和)和泉屋庄次郎刊絵入 大本三冊 同右桑村半蔵後印本(国会)とあるものを閲覧したが、本書と比べると、「釋尊記 はし書」の一ウ・二オに当たる部分が、本書にはあるが、国会図書館蔵本には欠落していることが分かった。その意味において、本書の校勘上の価値は十分にあると言えよう。

5, ものぐさ太郎

①刊本。②ものぐさ太郎。③xPL 790 M6。④なし(剥離した痕跡あり) ⑤おたかの本し 物ぐさ太郎。⑥江戸前期。⑦ほぼ良好。⑧18. 2×26. 8 纏の帙入。帙題(2. 2×18. 4 纏)「物ぐさ太郎 丹緑本」⑨濃紺。無地。⑩本文共紙。⑪楮。⑫袋綴じ。⑬1 冊。⑭26. 8×17. 5 纏。⑮20. 5×15. 5 纏。⑯15 丁。⑰10 行。1 行 18~19 字ほど。⑱上 2 図 第一図(二ウ)・第二図(七オ)。⑲丹緑本。版心 「物ぐさ 一~十六」

6, 二十四孝

①刊本。②二十四孝 ③xPL 90.J3 N48。④題箋(11.5×3. 5 纏)「二十四孝十五」(原・単・刷・中)。⑤なし。⑥享保頃(1716 から 1735)。⑦良。⑧24. 5×16. 5 纏の帙入。帙題(2. 9×10. 9 纏)「廿四孝」⑨濃紺地に浜松模様(表)・茅草模様(裏)。⑩本文共紙。⑪楮。⑫袋綴じ。⑬一冊。⑭16. 0×23. 6 纏。⑮13. 0×20. 0 纏。⑯全 37 丁。⑰13 行。1 行 12 から 13 字ほど。⑱24 図。第一図(2オ)・第二図(三ウ)・第三図(五オ)・第四図(六ウ)・第五図(8オ)・第六図(九ウ)・第七図(十一オ)・第八図(十二ウ)・第九図(十四オ)・十図(十六ウ)・十一図(十八オ)・十二図(十九ウ)・十三図(二十一オ)・十四図(二十二ウ)・十五図(二十四オ)・十六図(二十五ウ)・十七図(二十七オ)・十八図(二十八ウ)・十九図(三十オ)・二十図(三十一ウ)・二十一図(三十三オ)・二十二図(三十四ウ)・二十三図(三十六オ)・二十四図(三十七ウ) ⑲帙の中に次の内容の紙片あり。「此本は、所謂「お伽草子」と云ます。二十三冊が一所に、享保頃に、大阪の渋川から刊行されました。二十三冊揃ったものは、村口に四百五十円で出ました。各一冊づゝ時々出ます。その中で、「猫の草子」は、富岡鉄齋の入札の時に、七十五円でした。二十四孝は割合にあるから安いのです。お伽草子本(横本)でない二十四孝は、二十四の小説からなつて、沢山出てゐます。それは、これとは、全然、別のものです。」これも、筆跡と内容、及び、室町時代物語大成の翻刻に見られる読点の多用という文章表記の特色と

の一致から、横山重氏の書かれたものと推測される。蔵書印「J.K.YAMAGIWA」(見返し)「長久 熊谷」。裏見返し左上に「ISSEIDO 東京神田 ¥15.00 9年1月 日」とある売り札があり、昭和9年に、神田の一誠堂書店から15円で購入したことが分る。

7. 蓬萊物語

①写本。②蓬萊の巻物。③xPL790.H6 ④「蓬萊の巻物」(16.0×3.2 糎)(原・単・書・左)。但し、閲覽時、「蓬萊の巻物」の「蓬」の字の部分が剥落していたので、担当者に知らせておいた。⑥近世前期。⑦良好。⑧桐箱(40.5×8.0×7.6)入り。桐箱自体は、大学で作ったと思われる新しいもの。⑨深緑地だが褪色著しい。金欄花唐草模様。⑩金網目。⑪鳥の子。⑫卷子本。奈良絵巻。⑬一卷。(上巻のみ存。下巻はなし)。⑭33. 4×962.6 糎〔他に軸2. 7 糎、桑の木製〕。⑮26. 5 糎。⑯継紙は、見返しを除いて計20枚。25 糎前後4枚、50 糎前後13枚、93 糎前後2枚。軸装の余り部分3. 3 糎1枚。⑰1行15字程度。⑱全5図(第一図 驪山に仙人が埋めた不老不死の薬から黄精が生え、仙人たちがそれを取った場面 第二図 あまてらす大神があまの岩戸に籠もり、常闇になったことを嘆き、神々が岩戸の前で謀を巡らす場面。舞を舞うのは、本文では「思兼の命」であるが、絵においては通常、「天宇受売命」となっている。ところが、本書では、本文は、「思兼のみこと」で挿絵も男装の神で、どう考えても「思兼の命」としか考えられない。管見では、挿絵においても「思兼の命」が舞を舞うのは本書のみである。その意味において、本書は、本文と挿絵の一致が見られる点が優れた特長となっていると言えよう。第三図は、田道間守が常世国から香実を取ってくる話で、絵は田道間守が香実、すなわち、橘の実を天皇に差し上げている場面である。勿論、古事記・日本書紀の原話では、田道間守が戻った時には、垂仁天皇は亡くなっていた訳だから、本書と内容は異なる。また、橘の実は、たとえば、中野幸一氏蔵『蓬萊絵巻』では、枝に四つほど生った小さい実を田道間守が捧げているが、本書では、大きな実一つを台に載せて献上しており、描き方が異なる(注4)

第四図は、大きい蛤が吐き出した気から誕生した三つの宮殿が描かれている。いわゆる蜃気楼である。図では海の波の上に大きな蛤が描かれ、そこから五色の彩雲が飛び出し、二つの宮殿を支えている。本文では三つの宮殿となっているが、絵では二つだけで省略されている。橘の実もそうであるが、たとえば、中野幸一氏蔵本では、本文通りに三つの宮殿が描写されており、数などの忠実さでは、本書はやや問題があろう。宮殿の中では、仙人が琴・琵琶などの楽器を演奏している。中野幸一氏蔵本は、仙人の年齢が若い印象がある。この蜃気楼の左側には、五匹の亀の背に乗った蓬萊山が描かれている。本文では、「ある

とき六の亀ひとゝころにあつまり海中にたゝよふところの大山を甲にのせてさしあげたり」とあって、六匹の亀が蓬莱山を差し上げなければならないので、本文と挿絵には齟齬がある。さらに、この蓬莱山の記事は、挿絵第二図より前にあるので、離れた位置にあるはずの挿絵がここにある理由を考える必要がある。一つ推測されるのは、第四図において、蜃気楼とこの亀の乗せた蓬莱山は、どちらも、大海の上にある存在ということで、一つにしてしまった可能性が考えられるということである。なお、他本では、ここには蓬莱山でなく、長生殿・不老門の絵が描かれている箇所である。その点でも、本書の特異な点が伺われよう。第五図は、麻姑仙人の話で、十五歳で継母の讒言により家を逃げ出し、山中に籠もり、不老不死の薬を嘗めたので、若さを保ち、三百年経った後、張重花（伝本によっては王方平とするものもある）に山中で出会ったが、十五歳の時の若々しいままであったという場面が絵画化されている。^⑩本書の本文は、中野幸一氏蔵本と近い。

以上が、いわゆる中世小説（御伽草子・室町物語）に該当する古典籍の一覧である。量として決して多いわけではないが、それでも、米国においては、ニューヨークの公立図書館のスペンサー文庫、ハーヴァード大学のアーサー・M・サックラー美術館などの後に続き、少なくとも、中世小説に関しては、全米で10位以内に入ることは間違いないと思われる。また、蓬莱物語を初め、熊野の本地、しぐれなどは、本文の校合、挿絵の比較を行う上で、大いに価値を有するものと判断される。ただ、やや端本が多いことが惜しまれる。なお、蓬莱物語（蓬莱の巻物）については、別稿で、翻刻し、解題を付けて紹介したいと考えている。

なお、中世小説以外にも、以下のものを今回閲覧した。

- 1, 役行者物語 (xPL 793.2 A82 V.1-3) 貞享五年 (1688) 刊本
- 2, 為愚痴物語 (x PL 795.S63 V.1-8) 寛文二年 (1662) 刊本
- 3, 古今著聞集 (MS PL 792 T2) 写本十冊
- 4, 十番切り (x PL 790 S61 57) 刊本一冊 (英王堂 (チェンバレン旧蔵書))
- 5, 伊勢物語 (MS PL787.I8 1494) 写本一冊 (享和二年 (1802)) イリノイ州立大は明応三年 (1494) とするが、奥書によるべきだろう。)イリノイ州立大は姉小路基総卿筆としているが、根拠不明)
- 6, 詞花和歌集 (MS PL758.27 14--) イリノイ州立大は姉小路基総卿筆としているが、根拠不明)
- 7, 曾我物語 (xPL 790.S6 1687 V1-12) 貞享四年 (1687) 刊本十二冊、

江戸版

- 8, 源氏物語 藤袴 (MS PL 788.4. G3 A2 16--) 写本一冊、栞形本、端本
- 9, 箱入娘 面屋の人形 (xPL 798 H3 V.1-3) 寛政三年 (1791) 刊本一冊
- 10, 住吉物語 (xPL 790 S9 1630) 大矢透氏旧蔵寛永版絵入刊本一冊
- 11, 住吉物語 (xPL 790 S9 V1-2) 寛永九年 (1632) 刊本上下二冊
「永九年壬申十二月吉日 中野氏道也梓」
- 12, 住吉物語 (xPL 790.S9 1759 V1-2) 宝暦九年 (1759) 刊本二冊
「皇都書林 寺町通松原下ル町 梅村三郎兵衛板」
- 13, 長明発心集 (xPL 791.2 C48 V1-8) 慶安四年 (1651) 刊本四冊
- 14, 新版 渡海苞徳兵衛島 (とかいみやけとくひやうへじま) (xPL 793. T58, V1-2) 刊本二冊

他にも、まだ多数の日本の古典籍が所蔵されている。またの機会に調査したいと考える。

注1, 和歌山県立博物館所蔵『熊野権現縁起絵巻』(勉誠出版、1999年2月、川崎剛志=解題・翻刻、高橋修=附説)所収。

注2, 拙著『中世小説の挿絵と本文の関連についての研究、平成10年度～13年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2)研究成果報告書』(課題番号10610429,平成14年3月)所収。

注3, 井田氏蔵本の引用は、室町時代物語大成第四(角川書店、昭和五十一年三月)に拠る。

注4, 中野幸一氏蔵本は、早稲田大学出版部『奈良絵本絵巻集・別巻3』(平成元年1月)に拠る。

付記 (今回の調査に当たって大変お世話になり、且つその後も大学図書館の職員数・蔵書数等の情報をお教え下さったイリノイ州立大学附属図書館貴重図書室の Alvan Bregman 氏、並びに、その他の係員の方々に衷心より謝意を呈します。また、同行して調査助手をしてくれた妻眞紀に感謝します。)